
VOCALOID minus EDITION

花音ユリ@Flow

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VOCALOID minus EDITION

【コード】

N6240Y

【作者名】

花音ユリ@Flow

【あらすじ】

この作品の主人公東条榊は、ある日偶然不思議な格好の少女と出会う。

花音ユリと名乗ったその少女は、自分のことを廃棄されたVOCALOID「マイナスナンバー」と言う。

これをきっかけに榊の日常は彼女たちマイナスナンバーとその廃棄もと…クリプトン研究開発部とのいざこざに巻き込まれていく。

各話ごとに中心視点が変わる基本オムニバス形式の短く中編小説集。

キャラ紹介（前書き）

VOCALOID二次創作と云えど、出てくるのはオリジナルマスターツとオリジナルボカロのみ。しかもボカロ要素ゼロでお送りします。

キャラ紹介

キャラ紹介

新しいキャラがでてき次第、随時更新予定

東条榊（とうじょうさかき）…18歳。今春この地域のバリバリの進学校を首席で卒業し、今は独り暮らし中。3年前に失踪した父親の行方を追っている。

花音ユリ（はなねゆり）…17歳 1。榊が最初に出会うマイナスナンバーで、いろいろな鍵を握っている。ナンバーは-06。

東条幻馬（とうじょうげんま）…68歳 2。東条榊の父親で、本編の時間軸から三年前に消息不明になっている。その当時はクリプトン研究開発部の総部長だった。

東条架奈（とうじょうかな）…29歳 3。東条榊の姉。本編の時間軸から15年前に原因不明の不治の病にかかり、コールドスリープ状態にされている。それ以来DNAをVOCALOIDの生体組織の生成に利用されている。

1 仮にもVOCALOIDなので、開発時の設定年齢。

2 失踪当時の年齢。

3 現在の年齢。コールドスリープ当時の年齢は14歳。

キャラ紹介（後書き）

クリプトンさんなんか色々とすいません？

更新は完全不定期でお送りしますm（）m

第1話 出会い（前書き）

予定より遅れてしまいましたが、VOCALOID Minus
EDITION本格的に始動です！

今回の視点は花音ユリ視点となっております。

一応主人公は東条榊とありますが、ユリ視点がかなり多いことが予想されるためもうユリが主人公でいいかなと思ってたりしますが、まあそんな細かなことはいいとして、文章が変なところもあると思いますが、是非「楽しんで」見てくれればと思います。楽しんでくださいいね！

それでは第1話、ごゆるりとお楽しみください…

第1話 出会い

静かな木漏れ日が照らす薄暗い森の中、ある筈だと信じている森の出口を探して、私は道なき道を走っていた。

「いたぞ！こつちだ！！」

「！！」

どこまでも追ってくる追っ手をふりきりながら、私は必死に走った。

どれくらい走り続けていただろうか。追っ手の姿が見えなくなり、目の前がだんだんと開けていった。

「出口……！！」

やっとの思いで森を出ると、以外にもそこは町外れの一角だった。町に出ても行く宛もなく、私はただ町中を彷徨くだけだった。

路頭に迷った私を、行き交うヒトは好奇だったり、嫌悪の目で見てくる。

たまに危ない人たちに乱暴されそうになったこともある。

そんな私に希望が見えたのは、ある冷たい雨の日だった。

いつものように道端に座り込んで雨の降る曇天を眺めていると、突然空が青い何かに遮られた。

「大丈夫か？」

「！！」

びっくりして目線を声のもとにずらすと、そこには傘から外れた銀色の髪を雨に濡らしている、眼鏡をかけた男のヒトが立っていた。

「そんなとこにいたら風邪引くぞ？きみ、家は？」

「あなた、私を見ても何も言わないのね」

「なにがだ？」

「私を変だと思わないの？」

彼は一瞬戸惑ったかのように見えたけど、「ふう」とため息をつ

いてから笑顔で答えた。

「逆にお前のどこが変なんだ？」

「え…？」

「何が変だと思っているのかは知らないが、俺はそれも全部一つの個性だと思うぞ」

彼はそういつて私に手を差し伸べた。

「ほら、そんなとこに座り込んでたら本当に風邪引くぞ？」

「あ…うん」

彼に言われるがままなされるがまま、私は彼の手をとって立ち上がった。

「とりあえず、君に何があったのかは深く探らないよ。また明日来るから、その時までその傘持っていてくれ」

彼が踵を返し帰ろうとする。私は咄嗟に、それを止めてしまった。

「あ、あのっ！」

「ん？」

「な、名前を…」

「ああ、そういえば名乗ってなかったな」

そういつて彼はもう一度私のほうを向いた。

「俺は東条榊。榊でいいよ。君は？」

「私はユリ…花音ユリ、です…。ユリでいいです」

「そっか。じゃあユリ、また明日」

「う、うん…。また明日、榊」

それが、私と榊の出会いだった。

次の日、私は昨日と同じところで晴れた真つ青な空を眺めていた。その手には、昨日貸してもらった青い傘をしっかりと握り締めて。

しばらくボーっと空を眺めていると、遠くから聞き覚えのある声が向かってきた。

「約束どおりいてくれたか。よかったよかった」

「榊！」

私は思わず大きな声を出してしまう。また榊と会えたから？うん、それだけじゃないような気がする。

「これ、返すね。今日は天気いいみたいだし」

「そうだな…っと、これから時間あるか？」

榊が時計を見ながら思い出したように言った。

「え？うん、大丈夫だけど…」

「そっか。それなら、これから少し付き合ってくれないか？」

「えっ?!」

急に誘われたのもあって、少し驚いてしまった。その所為か、胸のドキドキが中々収まってくれなかったけれど、私はそれを気取られないよう、静かに答えた。

「うん…いいよ」

「よかった。それなら、早く行こう！」

榊は私の手をとって歩き出した。

「あの、榊？」

「ん？」

手を引かれて歩いてほしいが経った時、私はさっきから疑問に思っていたことを榊に聞いてみた。

「私たちは一体何処へ向かっているの？」

「うーん、そうだな…何処がいい？」

「えっ…」

榊は私の手を引いたまま話し始めた。

「いやあ、実は何処行こうとかまったく決めてなくてさあ。あの時は咄嗟に誘っちゃったんだけど…。ユリは何処に行きたいところあるか？」

「そういわれてもなあ…」

その時、不意に私のおながなくなってしまった。

「あ…」

そういえば、あそこを抜け出してからまともに何も食べてなかっ

たな。

「よし、それじゃあカフェに行こうか」

私の気持ちを察してくれた榊は、近くにあったカフェに連れて行ってくれた。

「このサンドイッチはすごく美味しいんだ」

榊は慣れた雰囲気でランチセットを二つ注文した。

ものの数分で運ばれて来たそれは、とても香ばしい香りを立てながら私の空腹感をさらに刺激してきた。

「じゃ、いただきます」

「い、いただきます」

私は最初の一口を口に運ぶ。その瞬間、私の中になんとも言えない感覚がはしった。

「美味しい…」

「だろ？暇な時はいつもここでこれ頼んでるんだよ」

それであんなに慣れていたので…と感心している間に、いつの間にか私はサンドイッチを総て平らげていた。

うん。また時間があれば来たいと思うよね、これは。

そう思ったとき、なぜか心の端っこがチクリと痛んだ。

ああ、そっか。私には「次」なんてものは存在しないから…

「ユリ、どうした？…どこか痛いのか？」

「え？」

気がつくとは私は泣いていた。何で泣いているのか、私自身にも皆目見当がつかない。そもそも私には…

「…ごめん。あまりに美味しかったから感動しちゃって」

咄嗟についた嘘。これは榊を心配させないため？それとも、自分に対する言い訳？

答えは出ない。今の私は、それを確認する術というものを持ち合わせていないから。

なら、せめてこれだけは言っておこう。

「…ありがとう。私を誘ってくれて」

精一杯の感謝の気持ち。人に向けて言ったのはこれが初めてかも
しれない。

「そんなお礼を言われることはしてないさ。ただただ、そこにおな
かの空いた女の子がいたからご飯を奢ってあげた。それだけのこと
さ」

そういつて榊は笑った。私をただの女の子として扱ってくれたの
は今までで榊くらいだ。

さっきから私の中にある気持ち。これを打ち明けるなら今しかな
い。

「あのね、榊。ちょっと話があるの」

「なんだ？」

「ここじゃちょっとアレだから、もう少し人気の無いところまで行
こう？」

そういつて私は榊を連れ、店の隣にある薄暗い路地へ行った。

「話つていうのはね、私の事なんだ」

私は自分の手に力を込めた。これを話せばきっと榊も私の事を普
通の女の子としてみてくれなくなる。

ちよつと寂しいけど、それでも自分の素性を隠し続けるよりはま
しだ。

「実は私、VOCALOIDなんだ……」

私は髪で隠してあった首もとの「-06」の文字を見せた。

「私は、その製造過程で何かしらの問題が起きて、廃棄されたVO
CALOID、マイナスナンバーの一人。向こうの機関…クリプト
ンが公に情報を公開していない、いわゆる闇の部分なの。私が知っ
ているだけでも、かなりの数のマイナスナンバーがいるわ。そして
私は-06、つまり「6期目」に廃棄されたVOCALOIDって
事。私が機関を抜け出した時、かなりの職員が血眼になって私を捜
しに出ている。だから見つかるのも時間の問題…。どう？びっくり
した？」

私の告白に、榊は意外な反応を見せた。

「…お前はどうしたいんだ？」

「え？」

「このまま見つかって連れ戻されてもいいのか？それとも、まだ逃げて逃げて、奴らが追ってこなくなるまで逃げ切って、平和な生活がしたいのか？」

榊の目は真剣で、じっと私の目を見ていた。

「それは…私は逃げたい。だけどあいつらから逃げる方法なんてもう何処にも…」

「あるさ」

「何でそんな事いうの?! 私の事…全然わかってないくせに…!!」
つつい熱くなってしまう。私のことは誰にもわかってもらえないと思っていた。私の事は私が一番知っていると思っている。だから、カツとなって声を荒げてしまった。

でもすぐに冷静になって、それは違うと自分をたしなめた。

「う、ごめん…」

「気にすることは無いさ。俺もちょっと無責任すぎたかな。自分の身の元も伝えないで…」

「榊の身の元？」

「ああ」

榊は間を置いて、ゆっくりと話し出した。

「質問は後で聞く。だから、まずは俺の話をよく聞いてくれ」

「わかった」

「俺の親父の名は東条幻馬。元クリプトン研究開発部の部長だった」
「!？」

「俺も小さい頃からよくそこに入り回っていて、VOCALOIDに対する知識もそれなりに知っていた。もちろん、マイナスナンバーの存在も…」

榊の表情が少し曇った。

「親父は3年前に消息不明になった。失踪直後に残っていたのは親父の所有する土地と建物、施設やその維持費などが書かれた資料く

らいだった。その資料の中に、親父が俺に遺してくれたものがいくつかあったんだ。一つは、ちょうどこの町の中心に位置する建物とその周辺の土地の利権、もう一つは、親父の取り掛かっていた研究の資料。この二つを受け取った俺は、親父の研究を引き継ぎ、今は親父が遺してくれた建物を家として使ってるんだ」

榊はここまで話すと、「ふう」とため息をついた。

「何か質問は？」

「あの、その家って何処にあるの？」

「ああ、それなら…」

榊は路地と反対の方向を指差した。

「あそこに見えてる丘の上だよ」

丘の上には、うっすらと建物のようなものが見えた。

「それじゃあ、研究って何を？」

「それは…言葉では説明しづらいんだよなあ…」

榊は困ったように頭をかいた。

「簡単に言うと、ユリみたいな子を助ける研究…ってところかな」

「???」

聞けば聞くほどわからないから、このことについてこれ以上聞くのは止めた。

「って言うことは榊は今一人暮らし？」

「まあ、そういうことになるな」

「ほかに家族は？」

「いないってことはないが…っと、そうだ、これも言うておかないとな」

榊はまた思い出したように言った。

「何？」

「VOCA LOIDは元のDNAはヒトのものだったのは知ってるな？」

「うん」

「その元になっているヒトって言うのは、俺の姉、東条架奈なんだ」

「え…!？」

「元々は昔不治の病に罹ってコールドスリープされていたんだが、誰かの助言でそのDNAをVOCALOID生成に使おうって事になったらしい。つまり、俺はお前たちの叔父的立場にあるってことだな」

榊はそう言っただけで肩をすくめて見せた。顔は笑っていたけど、何処か寂しそうだった。

「榊は、辛いじゃないの？お父さんが行方不明で、お姉さんもそんなことになったまま、たった一人で生きるなんて…」

「ああ。少なくとも今までは辛くなかった。たとえそばにいないくても、俺は親父の跡を継ぐことで親父を近くに感じていた。姉さんだって、意識が無くたって俺の手の届くところにまだいてくれていた。そう思うだけで、辛さは微塵にも感じなかったんだ。それに…」

榊は私の頭の上にポンと手を置いた。

「今の俺は一人じゃない。ユリって言う、大切な友達ができたんだから」

「…!！」

そう言われた時、私はなんとも言えない気持ちで包まれた。これは何なんだろう…？

「さ、湿っぽい話は終わりだ。何処か日のあたるところへ行こうか」
そう言っただけで榊は歩き出した。私はその背中が、とても大きく見えた。

きっとこのヒトなら、私たちの哀しい運命を変えてくれる…!

「榊!！」

前を歩く榊を呼び止める。それに気づいた榊は立ち止まり、私のほうへ振り返った。

「どうした？」

「私、仲間を…他のマイナスイオンを救い出したい!そして一緒に笑える未来を作りたい!!だからお願い、榊の家に連れてって!私にもその研究、手伝わせて!!！」

「ユリ…本当にいいんだな？」

「うん！！」

私の固い決意に、榊は納得したようだ。

「わかった。でも、これから大変になるぞ？覚悟はいいな？」

「もちろん！！」

そうして私は、晴れて東条家の一員になった。

そしてこれが、私と榊の新たなスタート地点。

これからどんな困難が待っていようと、榊なら乗り越えられる。
そんな気がしていた。

真の困難とはどういうものなのか、榊は未だ知らないけれど…

第1話 出会い（後書き）

どうでしたでしょうか？楽しんでくれましたか？？

自分的に、物語の出だしとしてはよかつたんじゃないかと思っています。
ます。

多分まだまだなんでしょうけど…

次回は今回の出来を越えるようにしていきたいと思ってます！

最近何かと忙しくて次話投稿がいつになるか分かりませんが…

期待されると実力が出し切れない夕子なので、あまり期待せずに、
それでも根気強く待っていてください！

第1・5話 出会いの後で（前書き）

お久しぶりです。そしてあけましておめでとうございます。
新年早々何をやってんだって話ですよね・まあいいじゃないですか。
今回の話は1話のアフターストーリー的な感じになっています。私
の本家ブログの言い方で言うと「後夜祭」になりますね。
まあ話事態は短いものですが、今後の話にとってすごく重要なところ
ですので、お見逃しなく。

第1・5話 出会いの後で

「ここが榊の家…」

「そ。それほど違和感無いだろ？家としては」

あの後、私は榊に連れられて榊の家に来ていた。今日から私も、ここに住むことになる。

推定7階建ての赤レンガとコンクリート造り。外装も内装も、見たところしつかりしていて住むのには苦労しなさそうだ。

「あ、ところでユリって料理作れるか？」

「料理？うん、一応人並みにはできるけど…」

「そっか。それならちよつとこっちに来てくれ」

そういつて案内されたのはキッチン…というには少し広い、どっちかって言うと厨房に近いところだった。

「やっぱり男一人で作るのには限界があつてさ。だから色々手伝つてもらおうと思つて」

「なあんだ、そんなことなら私が毎日作つてあげようか？」

「いいのか？」

「うん。私料理作るの好きだし、何かリクエストあつたら珍味から民族料理まで大抵のものは作れるから」

「そうなのか？じゃあお願いしちまつても良いか？」

「おけー。任せて」

というわけで私の役職はめでたく「料理当番」に決まつた。

「だけど大丈夫か？これから色々仲間が増えていくにつれてだんだん一度に作る量も増えていくと思うが…」

「そこらへんは心配しなくていいと思う。私はちよつと特殊だけど、他のマイナスナンバーも家庭料理くらいは作れる知識があるはずだから」

「そつなのか？」

「もともと介護用やコミュニケーション用に機能が発達した個体も

作ってみたいだし、少なくとも私の代まではみんなそんな感じだったよ?」

「それなら、問題はなさそうだな」

そう、多分問題は無いはずなんだ。あのヒトが開発に携わっている限りは…

私がこうしている限り、あのヒトが開発を降りるなんて考えられない。

「よし、じゃあ後はこの家の設備の場所だな。ちょっと広いから覚えるのは大変かもしれないが…」

「わかった。今日はもうだいたい遅くなってるし、急いでまわる?」

「おう」

それから小一時間、私と榊は広い家の中を歩き回った。一階だけだというのに、かなり歩き回った気がする。

「1階と2階は体育館や遊戯室、図書室とかがあって、一般にも格安で貸し出ししてる。たまに体育館とかでこのあたりの地区の大会が行われたりするんだ」

「3階以降は?」

「元々研究員の宿舎だったみたいで、空き部屋がいっぱいある。保護したマイナスナンバーにその部屋を使ってもらって寸法だ」

「なるほどねえ」

1階には体育館と多目的ホール、果てはプールまであったりした。2階には図書室や遊戯室、華道や茶道の為の和室なんてのもあった。「うん、大体わかったわ。でも、こんなにたくさん施設の運営はどうしてるの?」

「今は自治区の人たちに頼んで一緒に管理してもらってる。そのうちマイナスナンバーが増えたらそこらへんも手伝ってもらおうと思ってるんだ」

榊にはちゃんとした将来設計があるようだ。それを聞いて、私は少し安心した。

他のマイナスナンバーも、ちゃんと幸せになれそうじゃない。

ともあれ、これでようやく私も榊家の一員としてここに居を構える準備ができた。私の部屋は、朝ごはんとかの料理の準備の手間とかも踏まえて、厨房から一番近い部屋にもらった。

家具とかは榊が準備してくれていたみたいだ。私はベッドに寝転がり、次なる出会いに期待して眼を閉じた。

第1・5話 出会いの後で（後書き）

ということとで第1・5話でした。第2話もがんばって書いている途中ですので、次回も期待しないで待っていてください！
それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6240y/>

VOCALOID minus EDITION

2012年1月6日18時46分発行